# ふらつき

歩くと、ふらつく。片足で立ちにくい。と、多くの人は、年のせいか疲れのせいにする。でも、それが急に起きたことなら、少しは慌てなくちゃ。

それは、午後から休診の水曜日のことだった。もう12時を過ぎていた。そこに、新患さんだ。「2、3日前から、ふらついて、転ぶような気がする。さっさと歩けない。ペラペラと早く話せない」と話すのは、78歳のS子さんである。

新患といっても、彼女は、5年前から何度も受診している。2年前には、2度も、「起き上がると、頭がクラクラする。まっすぐに歩けない」などと、なぜかいつも遅い時間に来院しては、「脳梗塞ではないか?」と大騒ぎをしている。その都度、「頭のMRI（磁気共鳴画像）の検査では異常なし」とカルテに記載されている。で、今日も、確かに、開眼して立つとふらつく。片足では、ふらついて立ちにくい。だが、その程度は、2年前と同じようだ。話し方も格別に遅いように思えない。

だから、今日は検査をしても、また異常なしという結果に終わるかもしれない。もう、終業時間に近いのだ。今から、スタッフには検査を頼みにくい。まずは、薬で経過をみよう。と思いながら、それも心配で落ち着かない。

で、気が小さくて優柔不断なワッシーは、結局はMRIの検査をしたのである。と、ナ、ナント。脳幹の橋脳というところに新しくできた小さな脳梗塞が見付かったではないか。おっと危うく、誤診するところであった。

ところで、S子さん。「2、3日前は旅行中だったし、疲れかと思っていた」と申し訳なさそう。そして、いつも遅い時間に受診することにも、それなりの事情があるのだろう。だが、その時間帯は、ワッシーもスタッフも疲れ果ててフラフラしているかも。早い時間の受診がお勧めである。

（石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：6/6北國新聞掲載）